

「西高卓球部の思い出」

29期 杉田明子（旧姓白山）

1974年春、西高生になった私は、迷わず卓球部に入部しました。中学校の3年間、中野区立第4中学校で卓球部であり、シングルスでもダブルスでも中野区の大会で優勝したことがあり、中学時代の仲間では高校に進学しても卓球を続けることは当たり前の選択でした。

当時卓球部には私を含めて6-7人の女子新入部員がいたと思います。1期上の先輩にも、3-4名の女子の部員がいらっしゃいました。卓球部は、OBの先輩が時々放課後の練習に指導をしてくださり、大学生は私たち15歳から見れば相当な大人に見えましたが、今思えば、学業の合間に遊びたい盛りの時期に、母校の後輩の面倒を定期的に見てくださったことは大変尊い行為であることがよくわかります。

もう40年前のことであり、思い出すことは皆おぼろげな記憶になってしまいましたが、中学時代に卓球部に打ち込んでいた私にとって、高校での練習はあまり気持ちが入らないというジレンマに陥っていたことは思い出します。どうしても練習の方法や指導の方法が変わりますので、自分の型を作り切れなかった私の中で、どうすればもっと上手になるのか、自問自答しながら苦しんでいました。

そういう中でも、仲間や先輩と切磋琢磨してなんとか部活を続けていけたのは、やはりそこに卓球部の温かい雰囲気があったからだと思います。練習風景で思い浮かぶことは、体育館を、バスケ部、卓球部、剣道部が同時に使っていて、卓球部のコーナーでは卓球台が4-5台置かれ、男女に分かれて、ローテーションを組んでシングルスやダブルスの練習をした記憶があります。ボール拾いに行くと、すぐ横で練習していた剣道部が竹刀の先でボールを止めてくれたりしたのを思い出します。

1年の夏合宿も思い出の一つです。1年上の先輩たちが練習のメニューを作ってくれて、朝はうさぎ跳びを含めた体力づくりがあり、相当きつかったのを思い起こします。井の頭公園の端までの往復のランニングもありました。寝泊りは西高会館の2階の和室での雑魚寝。朝から晩まで、ひたすら卓球の練習をして、たっぷり汗をかいたと思います。

40年前の卓球部創部30周年記念部誌を拝見しましたが、当時はちょうど我々が現役高校生だったわけです。その中に同期の橋本ユキ子さんが「オール・マイ・ピンポン」との

タイトルで書いた文章が掲載されていました。それを読んで、2年生の都大会で橋本さんと2人で組んだダブルス戦で強豪私立高校のチームを破り、なんとか5回戦まで勝ち進んだことをまざまざと思い出しました。相手の高校チームにはコーチがつきっきりで細かく指導しており、橋本さんと私は2人だけで参加した都大会で、お互いを励ましあいながら勝ち上がっていきました。橋本さんの文章には、試合前に二人で納得がいくまで練習した、と書かれています。必死の練習のおかげで5回戦まで進出という成果に結びついたのでしょう。確かにあの高校2年の夏、夏休みが終われば自然退部という時期に、良い思い出を刻むことができたと思っています。

わたしにはもう一つ思い出すことがあります。それは、1975年6月に荻村伊智朗氏がサウジアラビア卓球団を引率されて西高の現役卓球部員との国際親善試合を行ったことです。その日は学校全体をあげて、サウジアラビア卓球団を歓迎し、全校生徒が見守る中で、サウジアラビア卓球団と現役選手との親善試合が行われました。サウジアラビアを代表する卓球団といっても、レベルは西高生の方が上だったようです。その後、女子卓球部も誰か出てきて試合をするようにと諭されて、私などの数人の現役卓球部女子が卓球台に進み出たところ、男子ばかりのサウジアラビア卓球団から「No」の音が響きました。驚いている我々の前で、荻村氏が、「ごめん、サウジアラビアは男性が女性と一緒に対戦することは宗教上の理由でできないらしい」とのこと。拍子抜けしたものの、人生初めての「国際経験」になったことは疑いありません。

大先輩荻村伊智朗氏が、ご卒業されて何十年も経っていたにもかかわらず、母校の現役生が活躍できるような舞台を作ってくださったことは、特筆に値するものと思われます。西高卓球部に籍を置いた諸先輩の想いが受け継がれて、現在の西高卓球部の歴史があることを、この機会にあらためて感謝したいと思います。